

きざねのたね

NO.86
月刊

第七輯 人物篇 第十八号
昭和四十年八月一日発行 (非売品)
岡山県都立郡吉備町東町三三三丁目方町四三三七番
吉備 靚 光 協 会

85号

○ 藤井高雅 (その二)

当時高雅の子紀一郎は十八歳、祖母、母、二人の弟の五人喜しにれて、一時神宮を停止されていたので、家計は豊かではなかつたようである。それにより父が佐幕派とみなされていたので、祖母の言もあり身に危険が及ぶことを恐れ上京を断念したものと考えられる。父高雅の一周忌の時も京都の山田孫兵衛から法要を営みたいから至急上京するようかなりきべし書状を受取つてゐるが、ついに墓参にも出向しなかつたという。

高雅の夢北後前にも述べたように通塞レ大藤家には相当の借金をかかへ全く破産の状況に陥つてゐた。これは何等の私心なく、憂國の精神に燃え一身を犠牲にして皇國のため東奔西走、ついに凶刃に墮れたのである。家運は次第に傾き家具はもとより家屋敷までも悉く手離し、紀一郎は明治九年五月七日、三十一歳の時備後国沼名新神社の福堂に轉じたが、同十四年頃失踪レ行方不明になつたのである。紀一郎は一男三女があつた。三女は之々に他家へ嫁ぎ、幸ひ多喜は再婚レ嫡男の春雄は大正元年九月六日妻子もなく三十四歳で没レ系統は断絶したのである。ここに特筆せねばならぬことは倉敷の富家林 孚一から借金してゐたが、孚一の義侠心によつて捧引され僅かに家系を継いでゐたようである。高雅の實兄堀家輔政の文書にこう記録されてゐる。

「倉敷村西本町(いまの倉敷市本町)住居菅種商大坂屋源助改名林 孚一大伴易安と申人 大藤下總守高雅江金子取替在之處、高雅於京都妻北之後、其兄塚家宮内輔政、倉敷村小野丹

右衛門(河知神社の神官)宅江止宿之砌招き取右金元利共相滞居申候分今般之御必衰歎傷之余御靈前へ証書相備度存候間、高雅息紀一郎高徳江引合候而回家所蔵之本居宣長翁短冊一葉贈候ハ、本子共帳面横取有ニ致、可申と懇談之趣、不堪感謝、則証書後便贈候ニ付備靈前 短尺宮内持参いたし候事、外ニ同人は宮内も懇切之御故、來書面大切ニいたし可申事 塚家宮内輔政 認。と書き残してゐる。

林 孚一は生前高雅と親交があり高雅は孚一から百數十兩の借金をしてゐたが、高雅の悲惨な北を聞いて同情し、その子紀一郎の贈つた本居宣長の短冊一枚とその証文を高雅の霊前に供へたのである。

(林 孚一は名は易安、字は了齋、仙松と号した。通稱は竹三郎という。兎島郡本目村(莊内)の石井傳蔵の三子で、文化八年正月に生れた。倉敷村の林 源介の養子になつた。林家は大坂屋と稱し代々菅種商「昔は漢法匠で菓草を売つてゐた」であつた。萬延元年五十五歳になつてから三男の源十郎に譲り孚一と改めた。時に森田節甫を招いて大いに勤王思想を鼓吹した。元治元年に山崎天五郎の罪で敗れた大沢逸平、真本保臣が遺書を携へて長州へ走らんとした時、道中が危嶽にありつたので、孚一は二人を招隠し、後ち無事に長州へ護送したことがある。また大平鏡波の妾には淨資金を切かに送つて救済した。その他勤王の志士の危難を救うたことは数知れなかつた。明治聖代となり村吏となり後ち窪屋郡長に推された。年はすでに七十歳に達したので暇を辞めようとしたが許されず、十六年になつて頼みかたない、これら閑居して花鳥風月に樂んだ。邸内に梧桐があつたので、これに因んで梧蔭と号した。二十三年に國家に盡忠したことによつて正七位に叙せられた。廿五年九月に病氣に冒されて八十二歳の高齡で他界した。鶴形山には林 孚一の頌徳碑がたてられてゐる。)

△ 高雅の詠める四季の歌を選んで載せる。

春 立春述懐

うきなばら去年ハよレの、花もみつ 今とレの行へいかにとせおむふ

夏 閑庭夏草

よるハ露ひるハほたるのやどりにて あるじちわけぬ庭の夏草

秋 月夜待人

池水に月ハやどれど人ハこず 垣のくづれもかひなかりけり

冬 初冬

萩のはの秋のなごりの聲あれん もミぢうちハる冬ハきにけり

兄の輔政は文久三年の元旦に高雅の安否をきづかひて花の詩を賦してゐる。

迎春色座待天明 遊客河堪憶母情 豈謂西鬼誰目下

三元擁決隔歎聲 去歲十有一月日 高雅登京榻未淨

三兄とは当時長男紀一郎は十八歳、二男卓は四歳、三男は甲造三歳である。紀一郎と甲造にフツては前に述べたが、二男の卓は東右衛門村(ソマ岡山市)の大森専門治の嗣子となり、福島の小学校校長を歴任し、大正十二年二月十八日六十九歳で没した。その子儒夫が現在当主として早島町塩地に住してゐるといふ。(本章は川入の塚家文書によつた)

△ 神戸事変

この事変は大政奉還、王政復古の慶應三年に、ソマの神戸市で備前藩士の部隊が行動中その先登を横切ろうとした外國人に傷を負はした事件である。この事件から六年前の文久二年には薩摩藩士ソマの神戸市泉の生麦部落で同様の事変を起してゐるこれを生麦事変といつてゐる。先づ生麦事変から簡単に述べ、それから神戸事変に入りたい。

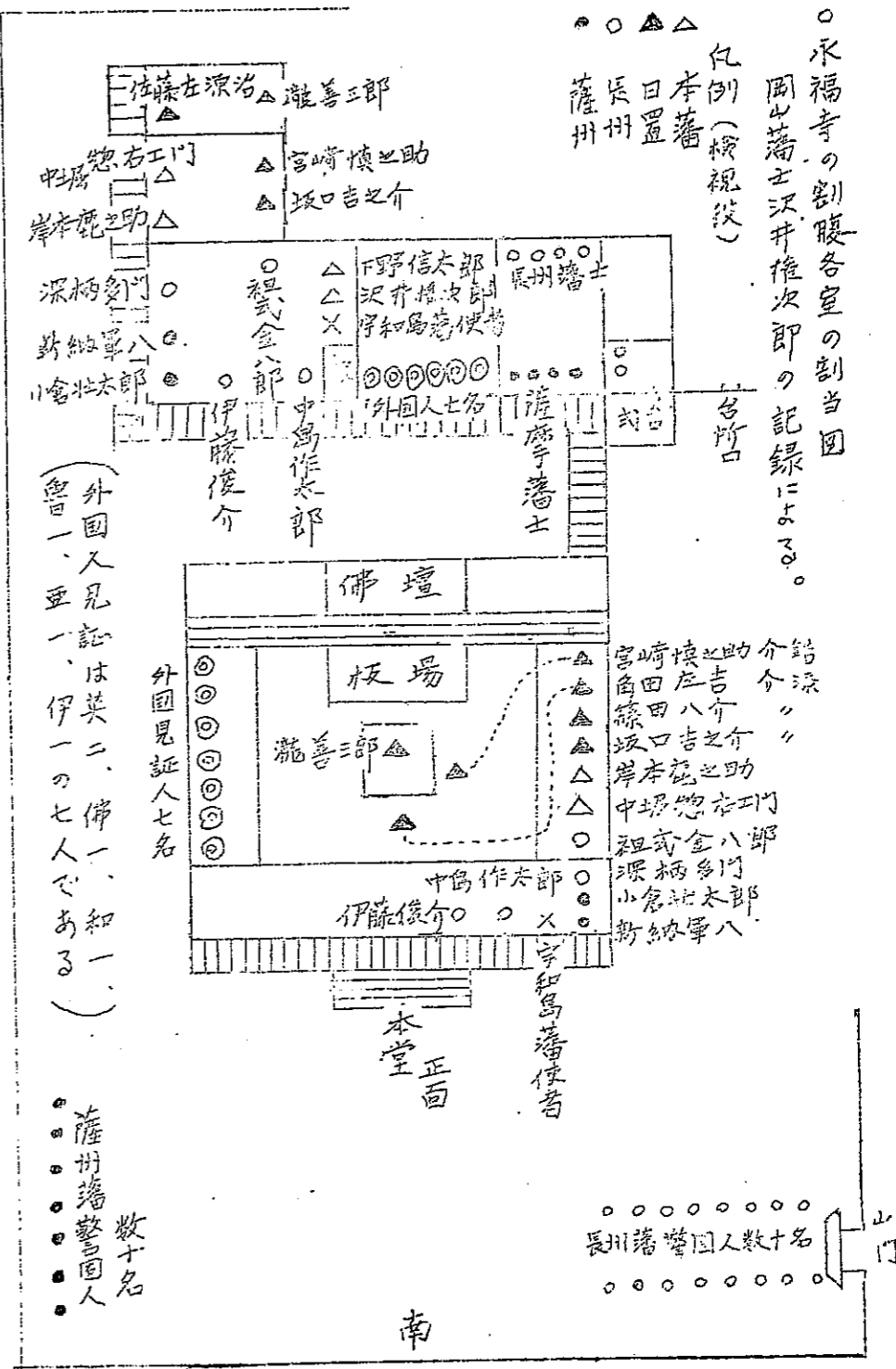
文久二年九月に薩摩藩主島津久吉は数百人の部隊を整え、江戸(東京)から京都へのぼる途中、品川、川崎を過ぎて生麦といふ部落にさしかかった所、前方を乗馬して散歩に出つてゐた英國人四名に出遇つた。部隊の先頭にあつた隊士は「下に、下に」と呼んで遠ざ

三 四

けようとしたが、我國の風習を知らなかつた、言葉も通じないので、こまづいてゐるうちに隊士は「無礼者」と大喝し、太刀を振つて一人を殺し、他の二人を傷つけた。その結果幕府は損害賠償として英國政府へ償金四萬ドルを仕拂つた。ソマの金に換えると一千四百四十万円になる。英國側では正金を受取つたが、その債権が廣貨造貨幣ではないと疑つて調べるとに中國人の専門家を雇うてその鑑定するの三日も要したといふ。これが生麦事変といふのである。笑ひ話のようであるが事實である。神戸事変は慶應三年の十二月、朝廷は西宮(兵庫縣)の沿岸警備の役を備前藩に命じた。よつて藩主池田茂政は國老池田伊勢貞考(天城にて高三万石)を總督に任じた。伊勢はその頃十五六歳の若殿であつたので同じ國老の日置帯刀忠尚(金川にて高一万六千石)を後見として軍務を處理させた。忠尚は貞考の家から出て日置家を嗣いだ人なのでその任に當てられたものと思われぬ。

忠尚の部隊は八百余人、翌年正月十日神戸に到着し、午後二時頃三宮の森を過ぎて先隊は早くも神戸の町端に出く外國人居留地へ差しかけた。折柄二人の外國人が左側から右手の溪側へ向つて隊列を横断しようとしたので、直ちに制止したがまたも一人の外國人が右側に近づいて向側へ隊列を横切らんとしたので、隊士が怒つたが、外國人は真赤になつて怒り、大聲で喚きながら第二と第三砲の間を横切つて脱走しようとした。この瞬間巻銃を持つてゐた一外國人が第三砲隊の先頭にあつた隊長の藩 善三郎に肉迫してきたので隊士のひとりか槍を揮つて突きかかり、善三郎を殺して逃げ去つた。他の外國人も海岸へ一目散に去つた。隊列なうも鉄砲を打ち放つものがあつて、ソマの外國人が倒れた。この時忠尚は全軍に鉄砲を禁じて行軍を早めたが、黒服を着た英國兵が二、三十騎馳けつけて進路を遮断し、別に六十人計りの英、佛兩軍の兵士が散兵して隊列に向つて猛射してきた。

○永福寺の割腹各室の割当図
岡山藩士沢井権次郎の記録による。



備前勢も應戦し、砲隊長瀧 源六郎、善三郎兄弟は大砲を生田川の土堤に据えたが銅子か悪くして容易に打てず、忠尚は戦いに利なきをみて全軍に命じて摩耶山道をさして退却した。この時大砲三門を残した。これは大砲の糧食があつて逃げて去つたからである。善三郎を覆つて置いたが後ちに行つてみると砲身は外国人に分捕され、台座は破壊され棄てられ

ていた。敵には死傷者はなく我軍では隊士の木田勇治と、足軽の草生村の林蔵、公軽、傷で終つた。この場所はソマの元町一丁目から大丸支店の方へ向ふ間、備前軍は山手へ引揚げる頃まで外国兵と討ち合った所は国鉄の三宮駅附近の地帯と想像せられる。

其後外国人との間に談判が開始せられ備前藩は責任者として多時發砲を命じた瀧善三郎の割腹によつて罪を謝すことになりその旨を英國公使へ書面を手渡した。その文面に

備前少将家光
日置帯刀馬廻士 瀧 善三郎 三十二歳
右者先假神戸通行の砌 外国人と行進 之義に付 公法を以て御處置被為在候間 其節茶碗等令の士官割腹被仰付候旨 御達に付右人体の者 明七日兵庫表へ差 出申候 此段不致取御届申上候 以上 沢井権次郎

瀧 善三郎は重駕籠に乗せられ、警固の兵隊三十余人にまもられ翌七日午後五時過ぎ、神戸旅籠町の絆屋長兵衛方の宿所に着き、九日午後十時半、兵庫の薩摩藩の本陣永福寺で外国人七名の検証のもとで行われた。立会人は

- 備前 幸藩家来徒 日付見届
- 中堀惣右エ門
- 同 附添 岸孝虎之助
- 日置家来 角田庄吉
- 同 附添 篠岡八介 改入助
- 本人介添 坂口吉之助
- 同人介錯 宮崎懐之助

であつた。善三郎は左の絆をのこして三十二歳を一期として神戸の浦に花と散

正信行年三十二歳 慶應四辰二月九日卒。

つたのである。
墓のふみレ費は今更引きかへて 神戸が字良に名をやあげなむ

と。北伴は西宮森村の陣屋で茶毘に附して岡山市の内田の南端、笠山の墓地に埋葬した。

裏面に辞世の歌を彫つてゐる。

永福寺は浄土宗の寺院で兵庫の南仲町にある。この寺に安置してある位牌には「龍泉隱善 菅正信忠居士」とした異つた戒名が刻まれている。

事件当時の外国係総督は宇和島藩主伊達宗城で、直接談判に当り、また切腹の席に立会したのは外国係伊藤俊介である。俊介は後ちに名を博文と改め、英國に留學して世界の状勢に通じ新政府の成立右大蔵少輔、工部大輔などを歴任し、政府の最高指導者になつた。新憲法の草案をつくり明治十八年には初代の内閣總理大臣に就任した。同四十年には日露開戦の際の任をおびて露西亞(ソマのソ聯)に赴く途中、ハルビン駅頭で暴漢のために暗殺されたのである。博文は長州藩の身分の低い家臣の子で天保十二年の生れであるから神戶事件の時は二十九歳であつた。千田綱常に博文の白髯姿の肖像がのつてゐることは周知のことと思ふ。また切腹の場へ立会つたひとりの中島作太郎は後ちの中島信行で、衆議院議長に選ばれた人である。

○ 堀家徳政

徳政は大藤高雅の父である。徳政は宮内村の旧家中田五右衛門重遠の二男として天明六年五月八日生れた。母は邑久郡尾海村の旧家藤岡萬右衛門の娘津島といふ。徳政は吉備津宮の神宮塚家公政に嗣子となつたのでその養嗣となり宗家を継いだのである。徳政は幼名さ常次郎といひ後ち直喜と改め成年して忠政に改めた。字は仲敏、後ち中道、中年に達して或部徳正、字を中郷といふ。後ちに徳正を徳政と改めた。國學を松茸藤井長門守高尚についで勉學し、漢學は中洲、眉山西先生に師事し、また天野道有父子にも學んだ。長じて江戸に留學し加賀の人、大田錦城の門に入つて号を鯉陵または水竹清居ともいふ。

七八

た。室は備中國足守藩士佐伯頼左衛門維國の長女喜智子を娶りその間に二子をもうけた。上が輔政で下が高雅である。徳政は平素身体が健康でなかつたので病に冒されて文政六年八月九日三十八歳の壯齡で生涯をこじたのである。歌人としてその詠歌は「吉備国歌集」に載つてゐる。その一つに

幽栖春雨

草も木もみどり色々春雨に 入めぬれ行く山かげのいほ

徳政の病兆した時、輔政は八歳高雅は五歳、室の喜智子は廿九歳であつた。若くして寡婦となり二幼鬼を抱えての養育はなみたいていのことではなかつたらうと想像せられる。養父の廣政はこの時六十歳であつた。喜智子には実弟二人があつた。上を維正といひ佐伯家を相続し、下の章は蘭學者として有名な蘭医、後ちの緒方洪庵である。つまり洪庵は輔政、高雅の叔父に當る訳である。

(緒方洪庵は足守藩士にれて、名章、字は公毅、通稱を三平といふ。後ちに洪庵に改めた十七歳の時に大坂の中主樹に於て西洋の醫學を修め、二十三歳で江戸に出て坪井信道の門に入つて蘭學を學び、後ち宇田川榕齋に師事し遠く長崎の地に至つて直接蘭人についで研學し十九歳で大坂に医家を開業し、傍ら道々塾を開いて多くの門徒を教養した。文政二年に幕府はその聲名を聞かして招聘せんとした。固辭して侍医になつた。醫學に關する著書數十種を遺し翌三年六月十日病氣にかかつて年五十四歳で没した。明治政府になつて生前の勲功によつて従四位を賜つてゐる。)

喜智子はこうした里方の血統を享けて聰明にれて貞淑な女性であり教養の豊みであつたことは遺児の生長によつて窺われるのである。喜智子は明治七年八月廿一日、八十歳の長寿を保つて逝つたのである。謚は「玉松伊都守根大親目」。位牌には佐伯喜智子婦人とある。

喜歌

喜智子

みる草もや、もえ出があすかぬに、いさ水かわんはるの若駒。
玉椿八千代の花をまつ君は、やそぢの春もふた葉なりけり。

○ 堀家輔政

堀家徳政の長男として文化十三年八月廿三日に生れた。幼名は作之丞という。八歳の時の文政六年八月九日に父を喪い、養祖父の広政の手に養育されたが、十六歳になつた天保二年の十月四日に養祖父も病にかかつて六十八歳で他界したので跡目相継となり、若駒にして吉備津宮に奉仕し一藤檢校の役を勤めた。通稱は右兵衛といひ後ちに宮内に改めた。幼時より同族の藤井長門守高尚に於て國學を修め、また歌道にも精通してゐた。室は山手村地頭片山の田家守安畏卿の娘登美子にして二男三女を産んだ。長男を作政といひ宗家を継ぎ次男の好謙は賀陽盛芳に養嗣した。他の三女は、つれも他家へ嫁いだ。作政は弘化四年四月五日の生れにして、明治の初年二十歳に達したので家督をつがせ、神官を辞して号を能蹊といひ、貞金に家塾を開いて子弟に國書や漢籍の教授に専念した。余暇あれば吉備の各地を遍歴して文墨に親んだ。殊に笠岡の閑、鳥羽や鬼島の味野の野崎、附などの歌人と交遊が厚かつたが七十四歳の明治廿二年癘で逝去したのである。

諡号を「神道護奇功業大人」という。子の作政は名を帆通へとほると改め父の死後三十余年に亘つて吉備津宮に勤仕してゐたが、老齡になつて軀を辞して明治四十年、六十一歳の時川入本村に移り産神八幡神社外敷社の神官を奉仕したが、昭和四年十月廿二日八十三歳の夭折を全うしたのである。(後九輯系譜篇 堀家氏系譜参照)

○ 松樹院孺人

元禄年間の赤穂浪士の壮挙は現代人の歩み方から考えると、とかくの譏誨はあるにせよ、事件以来二百六十余年、日本人に廣く親まれ、歌舞伎、浪曲、淨瑠璃や雜史などに仕組まれて民衆の心を以てく引きつけるものは外にはあるまい。恐らく將來にあつても日本國が滅び歴史が塗りかえられな限り、永遠に消えうせるものではないと思ふ。その赤穂浪士の首領であつた大石内蔵助良雄の生みの母君はいまの倉敷市藤戸町天城の領主岡山藩主池田氏の國老祿高三万二千石池田出羽由成の第五女である。寛永十八年の生れで、名を於熊といひ、幼少の頃事情があつて家老軀祿高一千石の垣見蔵入平馬のもとに養女となり大石家に嫁いたのである。父由成は心宗院といひ、墓標は臨濟宗の海禪寺の背後にある。母は明嚴院尼といひ一向宗の静老寺にその墳墓がある。

(於熊はいまの岡山市野田屋町の西川に沿ふた東側にあつた天城の下屋敷で誕生した。その事實は文献の示す處である。この屋敷は明治の末期まで現状のまま、に家屋や庭園、西川から水を引きいれて造られた立派な泉水などが残つてゐたが、後年悉く取り毀されてしまつて市街地となつてその跡かたは無い)。

於熊は万治元年三月廿六日十八歳の時、ニフ年上の赤穂藩主浅野氏の國老祿高一千五百石大石権内良昭に嫁入此して、次の翌年には早くも良雄をもうけたのである。(おわり) この項未完

飛竜	中華	そのは
赤木製麺工場		
吉備局電一七二番		
吉備町・下撫川		
エバーツ形式		
中山ふとん店		
吉備町・本町		
吉備局電四四番 有線七一〇番		